

などの影響もあることから、ここで低下した理由を語りきることは難しい。自己有用感の変化については、何が作用しているのかさらに分析を進め、教育課程全体の見直しを図っていく必要がある。

3点目に未来デザインの学習の成果についてである。本校が未来デザインの学習を行った最終評価をするために、創造性・協働性について2年次の10月と4年次の12月を比較した。数値を見ると、どの学年も数値の上昇が見られた。未来デザインの目標である協働性・創造性が上昇しているということは、子どもたちにとって有意義な学習であったと言えるであろう。これまでの未来デザインの学習において、子どもの姿から毎年、学習内容や学習方法について教員が吟味してきた成果であると考えられる。

③ 子どもの未来デザインの捉え

「子どもが未来デザインの学習をどのように捉えているのか」を調査するために、「①未来デザインの時間は楽しいですか」「②来年度も未来デザインの学習をしたいですか」の2項目についてアンケートを行った。①については各学年の8割以上が「楽しい」と回答し、②については各学年の7割以上が「来年度も学習をしたい」と答えた。この内実を探るために、アンケートの記述を分析した結果、以下のことが明らかとなった。

- ・自分のやりたいことを追究していく過程で、ゆるやかな上下関係の基で協力する価値を見出し、1年生は上級生になる自覚、2年生は上級生としての自負をもって次の学年への期待感を高めている（低学年）。
- ・身近な社会である学校をよりよくしていくためには固定概念にとらわれない新奇なアイデアを出す必要があり、仲間とともに次々とアイデアを出し合ったり練ったりすることに意欲をもって活動している（中学年）。
- ・多種多様なニーズに応える活動を通して、互いの考えを尊重しながら問い直し、集団としての関係を高めていく一連のプロセスの効果を実感している（高学年）。

以上から、子どもの「楽しさ」の内実には「やりたいことが追究できること」「アイデアが創造できること」「よりよい集団になっていくこと」が関係していることがわかった。楽しいと本気で感じているからこそ、来年度の学習への期待度も高いのではないかと考えられる。

（2）教師への効果

教師へのアンケートの分析・考察から本研究が、教師に与えた効果として次の2点が明らかとなった。①未来デザインを通して、教師の児童理解が高まったと全員が肯定的に答えた。②未来デザインを実施するにあたっての教員間の連携に関しても、全員がその必要性を感じていることがわかった。

（3）保護者への効果

保護者アンケートを2020年11月に実施した。アンケート結果を見ていくと、保護者の多くが、未来デザインの活動を好意的に捉えている。質問項目「未来デザインの活動は子どもの成長に効果があると思いますか」では、「大変そう思う」「そう思う」のいずれかを回答した保護者が全体の80%以上を占めている。また、質問項目「未来デザインの活動は、保護者にも開かれた活動になっていたと思いますか」においても、「大変そう思う」「そう思う」のいずれかを回答した保護者が全体の80%を越えている。このような結果から、保護者は全体的に本校での取り組みを理解していることがわかった。

（4）パートナーへの効果

4年次の高学年プロジェクト「社商店街を盛り上げよう」において、学習に協力して頂いたパートナーにアンケートを実施した。そのアンケートを基に、パートナーが「未来デザインの学習の効果をどのように捉えているのか」について考察した。その結果、デザイン思考を取り入れて創造していこうとする未来デザインの学習にかかわることで、パートナー自身の創造性を刺激することになった。これは、子どもたちが提案するアイデアが子どもならではのアイデアであり、パートナーの商品開発や接客に新たな視点を与えるものであったからだと考える。

6 今後の研究開発の方向性

(1) 創造性と協働性の構成要素と附小っ子アンケートの関連性

本研究では、創造性を「課題形成力」「創出力」「省察力」、協働性を「発信力」「共感力」「協働的理解力」の6つの構成要素に分類した。そのため「附小っ子アンケート」の項目を6つの構成要素から検討・修正し、それらの要素の高まりを定量的に分析する必要があるだろう。

(2) 学習形態の検討

本研究では、低・中・高学年による2学年での「異学年交流」の有効性について論じることができなかった。今後は、「1学年でのプロジェクト」や「3学年でのプロジェクト」など学年を様々な形で組み合わせ比較研究を行い、未来デザインの学習に適した学習形態を探っていきたいと考えている。

(3) 教育課程の再編成

本校がめざした「創造性」と「協働性」は未来デザインの学習だけで育まれるものではない。また、本研究では十分な考察のできなかった「自己有用感」に関しても、教育課程全般で高めていくものである。さらに、学校には多様なニーズをもった子どもたちが存在する。以上のことを考慮すると、今後は、未来デザインを中心に据えた教育課程の編成を行い、それに伴って教科の再編・統合も検討していく必要がある(図9)。また、未来デザインにおいても、子どもたちの多様なニーズに応えられるように、個人で学習課題を設定し、とことん追究できる「探究領域」、2学年の異年齢交流で実施する「プロジェクト領域」、第1学年～第6学年の縦割りで活動を行う「特別活動領域」という新たな枠組みで、さらに研究を進めていくことが重要である。このようにして、教育課程全般で子ども一人一人の「創造性」「協働性」「自己有用感」の育成に取り組んでいきたいと考えている。

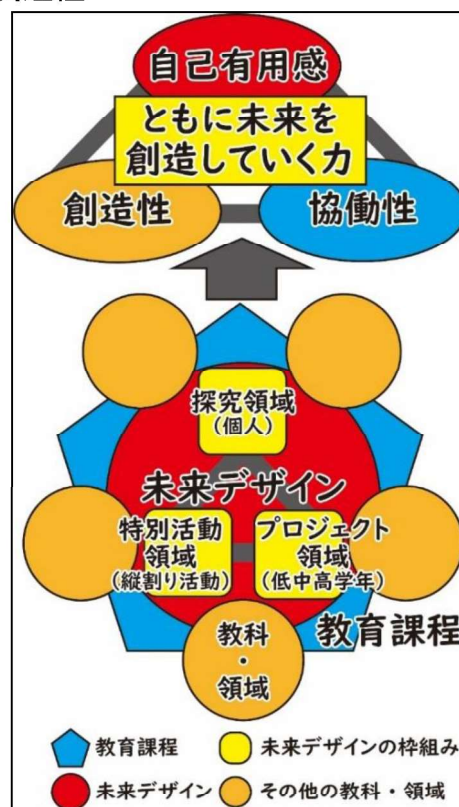


図9 未来デザインを中心に据えた教育課程の編成

(4) 研究が継続できる組織体制

本校の勤務年数を調べると、3年目以上の教諭が平成30年度では63.7%であったのに対し、令和2年度では36.9%と大幅に減少していた。学校に新しい風を吹き込むという点では、1・2年目の教員が増えることは歓迎されるべきことである。しかし、4年間の研究を進めていく点では問題となることが多かった。まず、研究を支える研究主任と未来デザイン主担当の勤務年数が短く、毎年のように担当者が代わってしまったことである。令和2年度の研究主任は本校2年目、未来デザイン主担当は本校3年目の教員が務めることになった。二人とも初めての担当であった上、今年度はコロナの影響も重なったため、研究の年間計画が立てにくく、書類を作成したり、運営指導委員会や全校研究会などの行事を開催したりするのにも、多くの時間を費やすことになった。さらに、4年目以上の教員が1名しか残っていないことも問題となった。本校が研究開発学校制度を申請するまでには、教員間で何度も「本校の何が問題で、どのような子どもの育成をめざしているのか」を議論しているはずである。また、1年次には「未来デザインの目標」や「附小っ子アンケート」を決める際にも、「未来デザインでめざす子ども像」について話し合ったことであろう。しかし、4年次の教員の中で、こうした議題に参加した教員は1名しかいなかった。そのことで、研究の目的やめざす子ども像などの研究の根幹となるべき事柄が教員間で共有されにくく、4年間の一貫した研究を進めていくことに難しさを感じた。今後は、4年間の研究の継続性を考慮した組織体制づくりが必要であろう。

兵庫教育大学附属小学校 教育課程表（令和2年度）

	各教科の授業時数											特別の教科である道徳	外国語活動	総合的な学習の時間	特別活動	新総合領域「未来デザイン」	総授業時数
	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図画工作	家庭	体育	外国語							
第一学年	306	0	136	0	0	68	68	0	102	0	34	34	0	34	102	884	
					-102										+102		
第二学年	315	0	175	0	0	70	70	0	105	0	35	35	0	35	105	945	
					-105										+105		
第三学年	245	70	175	90	0	60	60	0	105	0	35	35	0	35	70	980	
													-70		+70		
第四学年	245	90	175	105	0	60	60	0	105	0	35	35	0	35	70	1015	
													-70		+70		
第五学年	175	100	175	105	0	50	50	60	90	70	35	0	0	35	70	1015	
													-70		+70		
第六学年	175	105	175	105	0	50	50	55	90	70	35	0	0	35	70	1015	
													-70		+70		
計	1461	365	1011	405	0	358	358	115	597	140	209	139	0	209	487	5854	
					-207								-280		+487	0	

*網掛は、特例により増減している時数を表している。

*本校は、本研究開発指定以前より英語学習を6年間継続して実施しており、1年生34時間、2年生35時間の外国語活動の時数を計上している。

学校等の概要

1 学校名, 校長名

ヒョウゴキョウウイクダイガクフソクシヨウガクコウ
兵庫教育大学附属小学校

校長 カミハラ ヨシヒロ
上原 禎弘

2 所在地, 電話番号, F A X 番号

〒673-1421 兵庫県加東市山国 2013-4 電話番号：0795-40-2216 FAX 番号：0795-40-2219

3 課程・学科・学年別幼児・児童・生徒数, 学級数

(幼稚園等の場合)

3歳児		4歳児		5歳児		計	
幼児数	学級数	幼児数	学級数	幼児数	学級数	幼児数	学級数

(小学校の場合)

第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年		計	
児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
73	3	99	3	74	3	81	3	90	3	70	3	487	18

(中学校の場合)

第1学年		第2学年		第3学年		計	
生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数

(高等学校の場合)

課程	学科	第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		計	
		生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
全日制	〇〇科										
	××科										
	計										
定時制	△△科										
計											

4 教職員数

校長	校長代理	副校長	学内教頭	教務	指導教諭	教諭	特定教諭	養護教諭	講師	栄養教諭
1	1	1	1	1	0	19	4	1	6	1
学習補助	ALT	スクール カウンセラー	事務職員	司書	計					
5	2	1	4	1	49					